

九成宮醴泉銘 — 新資料による考察と新たな展開 —

寺内進

はじめに

この度、地方の旧家で九成宮醴泉銘の拓本を目にする機会を得た。当初、何か違和感を覚えながらの拝見ではあったが、葉を繰るうちに、これはすごい発見ではないかと思えてきた。すぐさま写真に撮らせていただき、家に帰っての検証となったのである。すると自分が今まで九成宮醴泉銘に抱いていたいくつかの小さな疑問が次々に氷解するとともに、これまで知られていなかったような情報やメッセーヂがこの拓の中にギッシリ詰まっていると思えてきたのである。

ここでは、この新発見？の拓本をもとに考察を進め、私の現時点での見解を述べることにしたい。

醴泉銘評価の現状

九成宮醴泉銘は「楷法の極則」と呼ばれており、書に関わる人々に最も知られた名蹟の一つである。宋代には既に手本としての人気が高く、明代では、昼夜拓を採る音が絶えなかつたとまで言われている。それらの拓は、さらに人々の需要に応

えるため、翻刻されたり、近代においては影印されたりして、数多くの種類の醴泉銘法帖が巷に出回り、現在に至っている。しかし今日、それらの中で最も高い評価を得ているものは次の二本に絞られた感があり、法帖出版の現況や書道テキストなどでの採用を見てもうなずけるものがある。

一つは「端方旧蔵本（端方本）」と称され現在三井文庫所蔵のもの、もう一つは「李祺旧蔵本（李祺本）」と呼ばれ、現在北京の故宮博物館に蔵されているものである。これらは共にいわゆる宋拓と呼ばれているものであるが、その良否、新旧については見解が二分されているとも言える。

端方本は清朝中期より高い評価を得ていたようで、錢大昕や楊守敬などいくつかの跋がついたもので、日本でも早くから広く知られてきた。それに対して李祺本は、一九六〇年代より俄に注目されてきたものである。線が太く、それまでにない重厚な趣があることと、何よりも泐損の文字が少ない、つまり端方本では潰れて見えなくなっている文字が、しっかり見えるということが評価されていることのようなのである。その背影には、王壯弘が一九八一年上海書画出版社より出した『増補校碑隋筆』の中で「以北京故宮藏明駙馬李琪旧蔵為最」と記し、泐損の文字が少ないことを根拠としてか、李祺本を北宋拓、端方本を南宋拓と決めつけていることが、李祺の名を高らしめた一因となっていることも見逃せない事実である。（琪は祺の誤植か。）

ところでこの二本について言及した記事がいくつかあるので簡単に紹介しておく。

まず、平成四年の『墨』九十五号「九成宮醴泉銘特集」の中で「碑帖研究、最上の拓本は何か？」と題されて、伊藤滋先生と表立雲先生の論文が掲載されている。これによれば、表先生は王壯弘と同様の泐損文字の有無を主な理由とし、また太い線質を高く評価して李祺本を推している。それに対し、伊藤先生は、朱家潛氏の論考を引用しつつ、李祺本にのみ存在する未損の文字は填墨描補によるものと断じ、李祺本の採拓年代については他の宋拓本と同時代だろうと述べ、線の太さについては今後の検討を要する問題だとしている。

また、水戸第一高等学校書道教諭であった故市野沢宏先生が、平成九年茨城県書道部会の研究集録に「九成宮醴泉銘——李祺旧蔵本の疑問——」と題した論文では、この二本にもう一本三井文庫所蔵の李鴻裔本を加えて比較論考し、「李祺本は端方本より新しい拓であり、填墨描補によって旧拓のように作り上げられたものだ」と結んでいる。

さらに、平成三年刊『原色法帖選40・九成宮醴泉銘（李鴻裔本）』の解説書で、中田勇次郎先生は「書品」（書の品格）をこの問題に絡めて「欧の書を遒勁と評するのは、どちらかと言えば、瘦硬に近いものにつながる。肥大なものとは結びつきにくい。……日本の正倉院の工芸品もみな細味につくられた美しさで、これも初唐における遒勁の芸術性から来ている。端方本の書を遒勁というのも唐の美術の特性に同調するものである。醴泉銘の欧法の書は、今のところ端方本やその系統のものが、書として優れていると思う。」と述べている。

以上は私の目にして論考であるが、他にもいろいろな見解があることと思う。主観論・客観論を含めて諸家の意見はさまざまというのが現状のようである。

蘆舟本

この蘆舟本という名は、今回新たに紹介する拓本に便宜上つけた仮の名である。

この剪装本の法帖を初めて見せて頂いた時、表紙保護のため外装として和紙のカバーがつけてあり、そこにしっかりとした欧法の楷書で「歐陽詢醴泉銘 蘆舟秘」と記されていた。これに因んで、この拓を「蘆舟本」と呼ぶことにするが、この蘆舟が誰なのかは定かでない。この文字を書いたのは、現所蔵者の祖父であることははっきりしているのだが、蘆舟の号は使っていないかったという。もしかするとそれ以前の所蔵者の名かも知れないが、何の手掛かりもない。後に、この和紙のカバーをはずして直接表紙を調べさせて頂いた。題簽の用紙はその五分の三程度をかううじて残しているものの、擦れてしま

つたためか、または最初から何も書かれていなかったのか、文字の痕跡は全く確認できない。表紙はというと、やや黄ばみのある厚紙を四枚程度貼り合わせたものに、その上からくるむように宋錦？（緞子）が張られている。四隅はすでに擦り切れて中の厚紙が顔を出しているが、他はしっかりとっており、筥や鞠を持つ人物の模様が織り出された表紙は、時代を感じさせる。（図版⑳）

中の拓自体はどうかというと、真つ黒でない、やや淡さを感じさせる拓調で、しかも上紙時の紙の継ぎ跡までがくつきり見てとれるほどの精拓である。松煙墨であるのか、所々白い粉を吹いたような箇所があり、また剥がれかけている所もあるが、装幀をやり直したようには見受けられない。一葉には、一行七文字、四行で、李鴻齋本とほぼ同様の剪装がなされている。この拓で最も不思議なのは、収蔵印も跋も全く無いことである。ただはつきりしているのは、当家においてすでに三代百余年を大切に保管されてきたものであるということである。

図版①は第一葉、②は第二葉目である。今まで見慣れてきた端方本などは、大分違う印象を持つのではないだろうか。ここでは紙面の都合上この二葉のみではあるが、見て取れる蘆舟本の特徴をあげてみる。

- 1 泐損部が全体に少ない。特に第一葉四字目「體」や第二葉四字目「六」などこれほどはつきり見えるものは翻刻描墨本を除けば全く無い。しかし一葉目四行「徵」の王部の泐損のようにこの拓にのみ存在する損傷があるのも事実。
- 2 線が全体に細くスツキリしている。これは李祺本のみならず端方本と比べても言えること。拓の文字の白と黒の境界部ははつきりしていてキリツとした線であるが、全体に細めと言える。
- 3 横画の右肩上がり弱い。特に一葉目の「宮」「監」「檢」などにはそれを感じる。
- 4 欧法らしい背勢の厳しさが無い。これは特に転折部に於いて言えることであるが、この二葉の中に多く出てくる「口」や第一葉一行目の「泉」などを見ても他の法帖のそれとは趣が異なる。

以上は最初に抱いた自分の感想でもあり、今までの拓との違いに戸惑いを感じた。しかし全体に流れる文字の自然さやス

ツキリした拓調には強く惹かれるものがある。そこで細かく検証を進めることにするが、ここで最も大きな問題がある。それはこの蘆舟本の拓が間違いなく原碑からの拓なのかということである。この辺の事状については、楊守敬が『激素飛清閣平碑記（平碑記）』の中で次のように述べて、原碑からの宋拓などほとんど見つからないことを力説している。

「余京師に在りて諸收藏家を訪求し、所謂宋拓なるものを見るに、大抵贋本多し、蓋し此の碑は宋時に在りて己に翻刻多く、今日得る所は宋本に非ざること論無し、すなわち宋本なるも亦必ずしも原石より出^{いで}ず。……」（著者訓読）

ではこの蘆舟本は果たして原石拓なのか翻刻なのだろうか。普通翻刻かどうかの判断は刻の状態や拓の肌を見ただけで、ある程度は判断できると思うが、それは経験を要する主観的な判断となるため、ここでは敢えて客観的な証拠を見つければいくいろいろ検証を試みた。その結果、整本に直す、つまり全拓の状態に戻してみることで大きな発見をするに至った。

整本（全拓）に戻す

この作業によって復元された端方本、李祺本は『墨』誌などでも目にしたことがあった。また、前出の市野沢先生は、この作業を通して、李祺本の亀裂部には補墨が施されていることを実証している。さて蘆舟本に於いてはどのようなことになるのであろうか。

この作業にあたっては、より正確さを期すために、まず近拓の整本を用意した。原拓なら更に良いのだろうか、後の作業を考えると少し怖いので、教育図書（株）から教材として出されている軸装のものを使い、それを下敷きとしてその上に大判の障子紙を載せ、その上にコピーしたものを貼り込むこととする。この時蘆舟本は百三パーセントに拡大せざるを得なかったことを付記しておく。また比較のため端方本、李祺本も同様に整本を作ることとする。（これも適宜拡大）

こうして出来たのが図版③④⑤である。まず一見してこの蘆舟本と端方本では碑の上部を横断している亀裂の大きさが全

く違うことが判る。また碑の最下部の状態にも差がある。しかしこれだけでは原石拓に結びつく証拠とはなり得ない。ところが近拓本（図版⑥）との照会によって決定的とも思える事実が見つかった。

それは碑の中央部左隅の「天」より走る亀裂である。これを拡大した一部が図版⑦⑧（蘆舟本）と図版⑨⑩（近拓本）である。碑文の二十三行、二十三文字「天」より、亀裂が右へ走り十五行目「食」を過ぎると二手に分かれる。斜め下方に進んだ一方の亀裂はさらに十二行二十八字目の「以」あたりからさらに二方に分かれる。この複雑に延びた細かな亀裂、蘆舟本のもとの近拓本のものとはピッタリ一致する。これこそ原碑より採られた拓であることの証に他ならない。翻刻ではここまでの徹底した細工をするだろうか。しかも、この亀裂を復刻することが、その拓本の価値を高めることに繋がるとも考えにくい。通常翻刻は剪装仕立てでの状態から模刻をし拓を採るため、整本に直すと行間の拓調や前後の繋がりに不自然さが生ずる。このあたりを勘案してみても蘆舟本は間違いなく、原碑からの拓であると考えざるを得ないのである。

この中央部の亀裂は、端方本、李祺本には見えない。すると蘆舟本はそれらより新しいむしろ近拓本に近いものなのだろうか。しかし、碑上部を横断する亀裂痕は圧倒的に小さいし、碑下部損傷も少ない。そこで更なる事実を見つるべく、同一文字について比較検証していくこととする。

文字の比較による考察

今回の蘆舟本を考察するにあたっては、より多角的に観察するため、できるだけ多くの種類の法帖と比較することを心掛けた。そんな中で作ったものが図版⑪⑫のような貼り込みである。ここでは五種を並載しているが、実際には七種（五種に宋拓榷場本として伝わるものと近拓本を加える）を、このような形で全文字が較べられるように作った。

まず、aは名称不詳の翻刻本である。同朋社『書学大系』第二十四巻として出版されたもので、原本は（財）日本書道教

育学会所蔵となっている。同朋社で一九八六年に出版した時には翻刻との認識は無かつたらしく、その後『墨』九十五号の文中で伊藤先生に指摘されてしまった代物である。誤刻があつたり拓もベタ黒状態で、翻刻であることには間違いないと思うが、他の拓には見られない蘆舟本との共通点が多い。

bは蘆舟本、cは端方本、dは李祺本である。eは秦氏本といわれる翻刻本であるが、評価の高いもので、楊守敬の『平碑記』や、王壮弘の『増補校碑隨筆』でも言及されている。cやdとの共通点が多い。これらの比較を試みると次のことが言える。

aとbは全体に細めで秀囲気も似ている。「體」「六」の損傷については若干異なるもののどちらも小さい。また「孟」の上部に見える米粒状の傷などは一致している。c d eについては、泐損部はほぼ共通していて差がないようにも見える。しかし⑫ dの「孟」「夏」などはかなり線も太く、「皿」の中の二つの縦画は、回りと接してしまっている。cと比べても刻された線がさらに傷んでいるようにも見える。また「夏」の三面目の縦画などもa bとc dでは大きな違いがあるように思う。

ここで注目しておきたいところがある。「孟」の上部の米粒状のキズである。よく観察するとc dにもかすかにその痕跡が見えるのである。それも何かを埋めたような痕跡である。因みに近拓本にはこのキズはしつかり米粒状に出ている。

このようにして七種を比較していくといろいろな共通点と相違点が見えてきて、また、それらのことがいろいろな想像をかき立ててくれる。こんなことを繰り返しながら、比較を進めた結果、ある一つの推測に落ち着いた。その重要なポイントと思われる文字を例に、私見を述べたい。(一)中の数字は整本時の行と字数である。

○建 (L 2・4 7) …… 凶版⑬

bは拓が鮮明でないが、aに近い。c d eは堂々とした文字であるが、「互」の左下へ抜く線がやけに長い。

○遠 (L 6・2 3) …… 凶版⑭

a bは泐損部がある。c dは完好。ここで注目は「口」部が「ム」に作られていること。全文中にある他の二つは「夕」

に作られている。

○同 (L7・12) …… 図版⑤

a bには泐損部がある。c d eには無い。しかしc dの「口」の二画目の横画は異常に太い。

○群 (L7・40) …… 図版⑥

bに比べてc dは少し太めである。旁の「羊」の二画目の点、cの入筆角度など如何なものか。

○穢 (L13・20) …… 図版⑦

旁の「止」部、aとdは「止」である。しかしbは「山」であり、縦画右上に接しているのは石花(キズ)であろう。

cやeはどちらとも断定し難いが「止」に近づいており、すでに「山」の痕跡はない。dでは完全に「止」になっている。

○乾 (L14・5) …… 図版⑧

偏の「日」部に注目。c dでは明らかに「田」となっている。これでは誤字である。それに対し、bでは「日」であり、中央の横画中心部にキズがある。

今ここに掲げた例を見ると、bに比べてcやdの文字は不自然であったり、よくないところがあることがわかると思う。

これはどうということなのだろうか。私には、後から刀が加えられたとしか思えない。「遠」や「同」のようにbの泐損部が消えてしまったことを考えればキズは補修し、文字をきれいに彫り直していいのではないだろうか。「乾」の誤刻はそんな中で生まれたのだろうか。横画についていたキズを縦画と思ひ、うっかり彫ってしまった大失態の一つではあるまいか。また三画目の縦画や四画目の転折部の微妙な違いも加刻によるものであろう。「建」の左下への払いが長くなってしまったのも、「群」の点が変形しているのも、加刻によるもの。「穢」の「山」が「止」となってしまったのは、キズを点と誤解して加刻修復してしまった結果と考える(ただしdは更に描墨がなされているようだ)。実はここには六例しかあげていないが、

不自然になってしまった文字はかなりある。異状に太い文字や線、傾いた縦画など、すでに感じられていた方もいることと思う。つまりb（蘆舟本）とc（端方本）d（李祺本）とを較べていくと、cとdは全ての文字が加刻されていると思えるのである。今まですばらしい拓と信じていたものは、刀が加えられてしまったもので、建碑時の文字の姿ではないということである（ただしbにも加刻が無いという保証はない）。

さらにこの検証を進めるが、このあたりで、はつきりさせておきたいことがある。今まで比較の対照としてきたaとeの拓の、私なりの位置づけである。

aは翻刻ながら、c dには無い情報を持つている。aの底本となった拓はc dよりは、かなり古い拓であろう。しかしbよりは後と思われる。c dはどちらも刀が加えられてしまった後の拓ではあるが、cの方が古い。dは既に言われている通り填墨描墨が多く、作為的にうまく作り上げられたものと言える。eは翻刻としては、忠実に刻された良いものなのだろうが、底本になった拓はcとほぼ同時期のものであつてその域を出るものではない。すると、今まで我々が接してきた拓では「端方本」がやはり最高のものだったということになるか。よつて今後の検証については、紙面の都合もあり蘆舟本と端方本を中心に見ていくことにしたい。

端方本の亀裂と修復について

先に端方本では、すべての文字が加刻されていると述べた。これはただ文字だけが補修されたのではなく、碑全体が修復されたと考えている。それは拓本の商人がキズの少ない拓を採るためにやったのか、公的な力をもって、碑の保全を目的に行つたかは知る術もないが、ある時期碑に入つていた亀裂や剥離したところを、今でいう「パテ」のようなもので埋め直して、そして、文字にも刀を入れたと推測している（ただし、小さな修復や補刀は、それ以前からも継続的に行われていたか

も知れない)。その理由としては先に触れた図版⑫「孟」の米粒状のキズの件もそうだが、何よりも、近拓本(図版⑥)に見られる下部を横断する亀裂の一部が、かすかではあるが端方本の整本からも確認できるからである。

図版⑱⑳(⑲㉑は近拓本、㉒㉓は端方本)はその部分である。⑲の初行「鹿」上部のヒビが左横へ進み「養」と「青」との間から二方に分かれ、一方は左下方へ斜めに延びる。これが㉒でもかすかに見てとれる。また、㉑初行「勅」と「撰」との間より左斜め下「高」に向かう亀裂も同様に㉒に見える。(他に図版⑳㉓も参照)。なおこれらの亀裂修復と考えられる痕跡は、宋拓として伝わってきた他の拓でも確認できる。

蘆舟本の中央部に見られたヒビ(図版⑦⑧)の補修復痕については確認できないが、端方本には必ず存在していたと考えている。また、碑上部を横断する大きな亀裂は、剥落が大きかったためか、文字の復元までは成されていないが、修復加刻の痕跡は十分に読み取れる。(図版㉔㉕端方本、㉖㉗蘆舟本)

碑の修復において最も手が加えられているのは、碑の最下部であろう。端方本の整本(図版④)を見ると、下部右端と中央左寄りの文字が拗損していて何故か六〜八行の末字は残っている。不自然である。そしてここに存在する「櫛」字こそ、これまで醴泉銘評価のバロメーター的な役割をしてきた文字でもあるのだ。近拓本(図版⑥)と比べてみると損傷の傾向には大きな違いがある。近拓本は下段三文字分がほとんど潰れて改刻されている事実はあるものの、拗損剥落の傾向としては右下部から進んでいるように思える。端方本(図版④)のそれとは一致しない。その点蘆舟本(図版③)に見える右下部の亀裂は理に叶う。こうして見ると、端方本「櫛」字も修復補刀された文字と見なさざるを得ない。整本での行末五字分を拡大した一部が㉘㉙である(㉚㉛端方本、㉜㉝蘆舟本、㉞㉟近拓本)。比べてもらいたい。

採拓時期について

端方本の採拓時期についてはいろいろと言われてきた。先人達がどのように見てきたかは題跋が物語るところでもある。錢大昕（一七二八〜一八〇四）は、「櫛」字に欠画が無いことを理由に唐拓。蔣衡（一六七二〜一七四三）は秦氏本（翻刻）の原本と比較し、「字画更に神采有り」との理由で唐拓、それも海内唐人法書第一精品としている。それに対し、楊守敬（一八三九〜一九一五）は、他本との校勘や、鄧文原の押印、更には「光」（L15・42）字に圈（かこい）が見られないことを理由に海内第一の北宋拓としている。以上は跋から見た評価であるが、さらに近年では李祺本の出現と王壯弘の判断に影響されてか南宋拓ということに落ちついているように見える。

しかし、どの説を採ってみても説得力には乏しい。「櫛」字が補刻によるものという前提に立てば、錢大昕の説は成り立たないし、蔣衡の説も主観的で鵜呑みにできるものではない。楊守敬が行った校勘自体は考証的で評価せざるを得ないが、補刻修復が成されてしまったという今の考えのもとでは、あまり意味を成さない。ただこの跋で触れている「光」字には、注目しなければならないと思っている。

守敬は、『平碑記』の中ですでに「光」字について次のように述べているのである。「世に絶後承前を以て真の宋本と為すも、余を以て之を論ずれば、原は必ず是れ光字なり完顔は光を諱めり。故に改めて承字と為すなり。光武の光は改むべからず。故に一圈を加う。後人は又承を改め光と為せしのみ。」（著者訓読）これは碑文の十九行、二十六文字目から見える四字句「絶後○前」のことである。現在我々が目にするテキストでは釈文にも「絶後光前」となっているが、翻刻本を除いて「光」字がはつきり見える拓は全くない。楊守敬の時代、すでに原碑は「光」に彫り直されていた（図版③）が、世間の大勢はそこには、「承」があったと考えていたのだろう。よって拓本評価の上でも、その文字が「承」と読み得るような潰れ方をしているものを宋拓とみなしていた風潮があったのだろう。このような中であって、守敬は自論を展開する。

それによれば、もともと「光」字であったのが、完顔（金王朝）によつて「承」字に刻し直されてしまったのだという。これは歴史的に考えなければならぬのだが、つまり宋が女真族の完顔に攻め込まれ、この碑があつた麟游一帯が金の支配下になつてしまつた（宋は都を臨安に遷し南宋と称した）時代、「光」字は金王朝にとつての忌避字となつたので「承」に直されたというのだ。（私の調べた限りでは、世宗第二子、皇太子であつた顕宗が死後章宗の時代に、光孝皇帝と追諡されたことに因むと考える）。しかし光武の「光」（L15・42）は、漢代の皇帝の名前の一字であつたので、潰すわけにいかず、圈（かこい）をつけた（図版③⑥）。その後誰かが金王朝滅亡後？に「承」字を再び「光」に戻しただけだ。というのが守敬の主意なのだ。言い換えれば北宋以前の拓であれば、L20「光」は存在していて、L15「光」に圈はない。南宋以後の拓であつたらL20「光」は「承」に直されていてL15「光」にも圈があるというのだ。なかなか理の通つた論である。

ところが、この論に従つて端方本を見ると、L20「光」は潰れており、むしろ「承」とも読める痕跡を残している。（図版③④）↓南宋以降の拓。また、L15「光」には圈が見られない。（図版③⑦）↓北宋以前の拓。というように矛盾が生じているのである。

楊守敬は二十代でこの論を展開した。そして七十二歳の時皮肉にもこの端方本の題跋を書くこととなつた。この矛盾には当然気づいていたであろう。そして下した結論は「北宋拓」であつた。圈が無いことを優先したのだ。それでも、これまで唱えられていた「唐拓」から時代を下げ、より真実に近づけることができたという意味においては大いなる前進といつてもよいのかも知れない。

この守敬が直面した矛盾点。これこそ修復に起因するものと考ええる。端方本の拓が採られた当時、この圈は何かを埋めて消されていたのではないだろうか。因みに、大西行禮氏旧蔵といわれる宋拓ではこの圈が確認できるのである。

次にこの条件で蘆舟本を見るとL20の「光」にはキズがあるものの明確に出ている（写真③⑤）。L15「光」に圈はな

い(写真③)。すると北宋以前の拓という条件を二つともクリアしていることになる。

こうして見てくると、端方本は「南宋拓」と見るのが妥当なのだろう。王壮弘の判断と奇しくも一致してしまうが、その背景は大いに違う。また、蘆舟本は、北宋以前であることは堅いと思うが、どこまで遡れるかは、比較資料の件もあり、何とも言えない。今後は表紙の布等の調査にも光をあててみると面白いと考えている。

蘆舟本からのメッセージ

その1

先にこの拓は、上紙時の継ぎ跡がくつきり見て取れると申し上げた。その後、整本に戻すことによつて、それらの継ぎ跡が連続性を持ち、はつきりと一枚ずつの拓紙として姿を見せてくれたのである。この碑の本文は、六枚の拓紙によつて採拓されている。拓紙は真ん中十三行目を境に左右三枚ずつである。上紙時の順番は、左下から始まり、順に上へと進む、四枚目は右下となり、再びに上へ進んで六枚目が碑文の冒頭の場所となる。

確認できる紙の大きさは縦五十七く六十四センチ、横四十一く五十センチと、六枚にバラつきはあるが、剪装時に切り落とされたことを考えると、これより若干大きいのだろう。しかし、現在の感覚から言えば、用紙はかなり小さい。

端方本でも上紙の様子を探ってみたが、部分的には継ぎ跡が連続して確認できるものの紙の大きさを推測するまでには至らなかった。どうも剪装後に補墨があるようだ。

また蘆舟本整本からは、採拓後の整本を畳んで保管していた時にできたと思われる擦り傷までも確認できる。五行目、十行目、十五行目、二十行目の三十七文字目あたりから四二文字目にかけて見られる縦線状のキズがそれである。十五行目が最もはつきりしている(図版③)。これらのことから蘆舟本には、剪装後の補墨もほとんどなされていないのではないか

と思われるのである。

その2

先に蘆舟本第一葉と第二葉の図版①②を提示した折に、特徴を四つほど上げた。その中の3番目として横画の右肩上がり
が弱いとして「宮」「監」「檢」を指摘した。なぜこのように見えたのか、ここでその種明かしをしたい。

図版①の第三行を見てみると、この六文字の中心が揃っていないのがお判かりだろうか。「中」の縦画をそのまま下方へ
延長すると、他の文字はどんどん右側へずれていく。この傾向は第一葉の各行で言える。実はこれこそ蘆舟本でしか判らな
いすばらしい事実なのだ。すでにご存じの方も多いと思うが、醴泉銘は石碑自体下方が広く、文字もそれに従って下に行く
ほど広がっている。整本を見ればお判りと思う。一行目例えば、行自体が左へ傾いているのである。この傾いた行への文
字の入れ方こそ、この図版①が物語るところなのである。つまり文字自体は垂直を保ち、書き進めるに従って文字の中心を
右へ右へとずらしていったのである。それが剪装本に直された時、傾いた状態で裁断された一行が垂直に貼り込まれたため
に、このような右肩上がり弱くしかも中心がずれている何ともぎこちない様相となってしまったのである。

ではこのあたり、端方本ではどうかというと、ほとんど中心がずれていないのである。つまり製本に直すと、行と一緒に
文字が傾いてしまっているのである。これは加刻による産物と思われる。繰り返し補刻が行われたために文字の縦画が行の
傾きに同調してしまい、その結果、中心もそろってしまったのだと考える。これは左へ傾く行だからこそ、このようになっ
たのだろう。

では、この行とは対称にある第二十四行をしてみる（図版③④）。蘆舟本では当然のことながら、端方本でも文字の中心
を今度は左へ左へとずらして布字されている様子が見てとれる。四字目の「茲」から「永」への移行や「令勃」「永保」「臣
歐」「詢奉」などはつきりしている。これらの文字も加刻されていると思うのだが、漢字の性質上、右へ傾く行には同調し

にくいので、中心をずらした状態が遺っているのだろう。このように見てくると、欧陽詢はあくまでも一文字ごとの均衡、整齊の美というものを大切にしていたのではないかとあらためて思えてくるのである。

おわりに

「これはすごいものかも知れない」この思いから出発した今回の論考であったが、考察を進めるにつれてどんどんそのすごさが見えてきた。気がついてみると、「端方本」までも「全て加刻したもの」と判断せざるを得なかった。これには自分自身驚いている。このままいくと欧法と呼ばれてきた筆法すら修正が必要となるかも知れない。起筆、収筆、転折、ハネなど特に加刻されているからである。これらの細かな検証は後日に譲るが、今回の考察によって醴泉銘が化度寺碑や孔子廟堂碑にもかなり近いものであるように思えてきたのも事実である。

それにしても、こんな拓が、よくも今日まで遺ってきたものだと思ふ。数知れない戦乱や天災、そして碑面上で繰り広げられた様々なドラマを余所に、ひっそりと息を凝らして、今日を待っていたとでもいうのであろうか。何れ蘆舟本の評価は定まるだろう。それによつては、この度の考察など一笑に付されてしまうかも知れない。しかし、こうして世に紹介することが今の私の責務と考えている。御意見ご教示を戴ければ有難い。

最後に、この稿を纏めることに御賛同頂き、貴重な資料を御提供下さった所蔵者御夫妻に対しては感謝の気持ちでいっぱいである。また御協力を下さった多くの方々、特に二松学舎大学の今川鷗洞先生には原碑の近拓本や写真を御提供いただき、大いに資するものがあつた。この場をお借りしてあらためて御礼申し上げる次第である。

① 蘆舟本第一葉

九成宮醴泉銘
 秘書監檢校侍
 中鉅鹿郡公臣
 魏徵奉勅撰

維貞觀六年孟夏
之月 皇帝避暑
乎九成之宮此則
隨之仁壽宮也冠

⑦

純和節食不貢
 既可蠲茲沉痼
 於當今斯乃
 斯銘其詞曰
 牽勤琛伯禹絕
 德不德玄功潛
 靈不焉如響赫
 謙潤下潺湲皎
 非貴天下為憂

⑧

屢加腴理猶滯
 氏舊宮營於曩
 粉屏以塗泥玉
 其力我享其功
 甲申朔旬有六
 乃承以石檻引
 性可以徵瑩心
 賞錫當功得禮
 貞獻則醴泉出
 痼又将延彼遐

⑨

純和飽食不責
 既可謂茲沉痾
 於常令斯乃
 斯銘其詞曰
 素勤稼伯禹絕
 德不德玄功潛
 靈不為如響赫
 謙潤下潺湲皎
 非貴天下為憂

屢加膝理猶滯
 或舊宮營於曩
 務屏以塗泥玉
 其力我享其功
 甲申朔旬有六
 乃承江石檻引
 性可激瑩心
 賞錫當功得禮
 貢獻則醴泉出
 痾又將延彼遐

①

a

九成宮醴泉銘

b

九成宮醴泉銘

c

九成宮醴泉銘

d

九成宮醴泉銘

e

九成宮醴泉銘

a

維貞觀六年孟夏

b

維貞觀六年孟夏

c

維貞觀六年孟夏

d

維貞觀六年孟夏

e

維貞觀六年孟夏

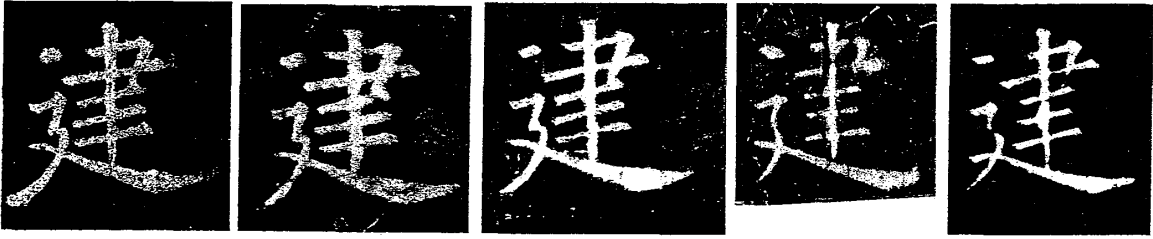
e

d

c

b

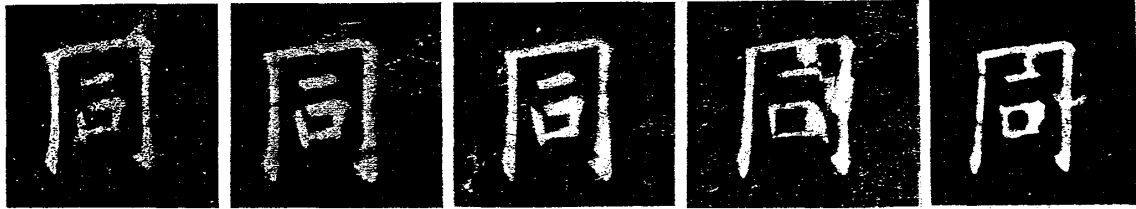
a



⑬



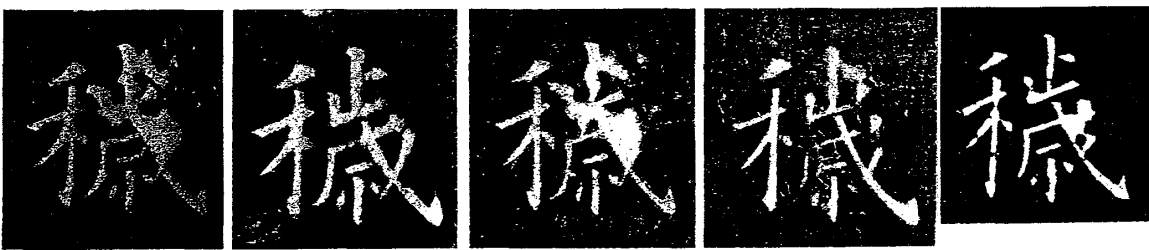
⑭



⑮



⑯



⑰



⑱

19

鉅鹿郡公臣
為池躋水架
雲霞蔽蔚日
誠養神之勝
越青丘南踰
措二儀之功
泉室每弊炎
一則可惜毀
於土階茅茨

20

鉅鹿郡公臣
為池躋水架
雲霞蔽蔚日
誠養神之勝
越青丘南踰
措二儀之功
泉室每弊炎
一則可惜毀
於土階茅茨

21

初撰
閣高閣
山迴澗
亦不能
採奉贄
人之憲
廷離宮
事貴回
觀壯

22

初撰
閣高閣
山迴澗
亦不能
採奉贄
人之憲
廷離宮
事貴回
觀壯

23

九成宮
 醴泉銘
 維貞觀六年孟夏
 起棟宇膠葛臺榭
 人從欲良足深尤
 皇帝爰在弱冠經
 暨輪臺北拒玄關
 風沐雨百姓為心
 性、聖上愛一夫
 於是斲彫為樛損
 既往俯察卑儉足
 求而無之在乎一

24

九成宮
 醴泉銘
 維貞觀六年孟夏
 起棟宇膠葛臺榭
 人從欲良足深尤
 皇帝爰在弱冠經
 暨輪臺北拒玄關
 風沐雨百姓為心
 性、聖上愛一夫
 於是斲彫為樛損
 既往俯察卑儉足
 求而無之在乎一

太清下及太寧
 京師飲之者痼疾皆
 而弗有雖休勿休不
 茲書事不可使國
 惟皇撫運奮壹
 契未紀開闢不臣
 載無臭無聲萬類
 呈三趾頌不輟工
 流我后夕惕雖休
 念茲在茲永保貞吉

太清下及太寧
 京師飲之者痼疾皆
 而弗有雖休勿休不
 茲書事不可使國
 惟皇撫運奮壹
 契未紀開闢不臣
 載無臭無聲萬類
 呈三趾頌不輟工
 流我后夕惕雖休
 念茲在茲永保貞吉

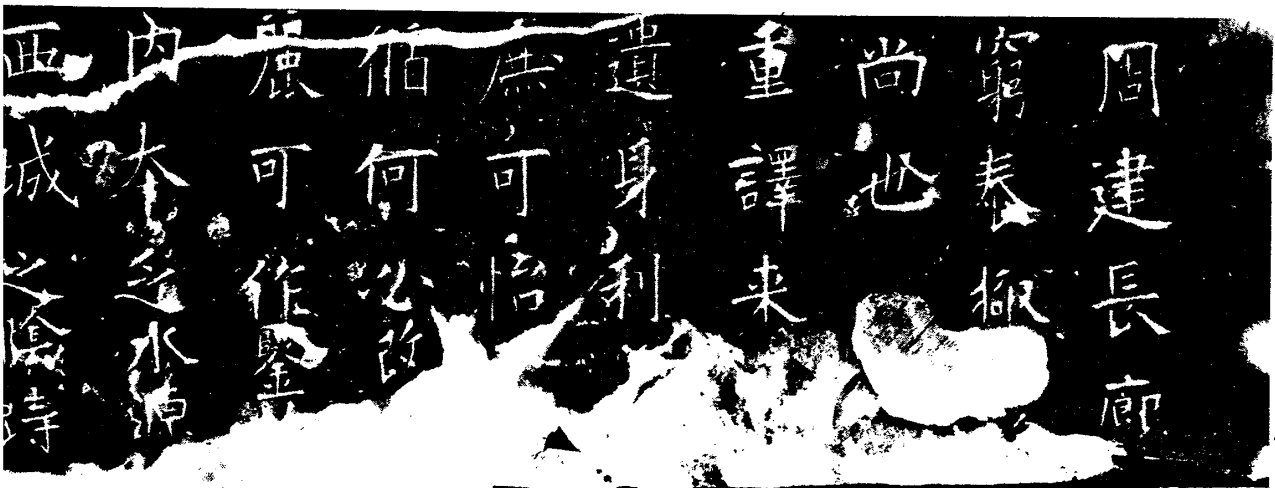
27



28



29



30

元年醴泉出
固懷撝挹
職在記言屬

文懷遠人書
帝力上天之
日含五色鳥
時泰慶與泉
陸持滿戎溢

31

元年醴泉出
固懷撝挹推
職在記言屬

文懷遠人書
帝力上天之
日含五色鳥
時泰慶與泉
陸持滿戎溢

32

元年醴泉出
固懷撝挹
職在記言
文懷遠人
帝力上天
日含五色
時泰慶與
陸持滿戎

③③ 絕後光前登三邁

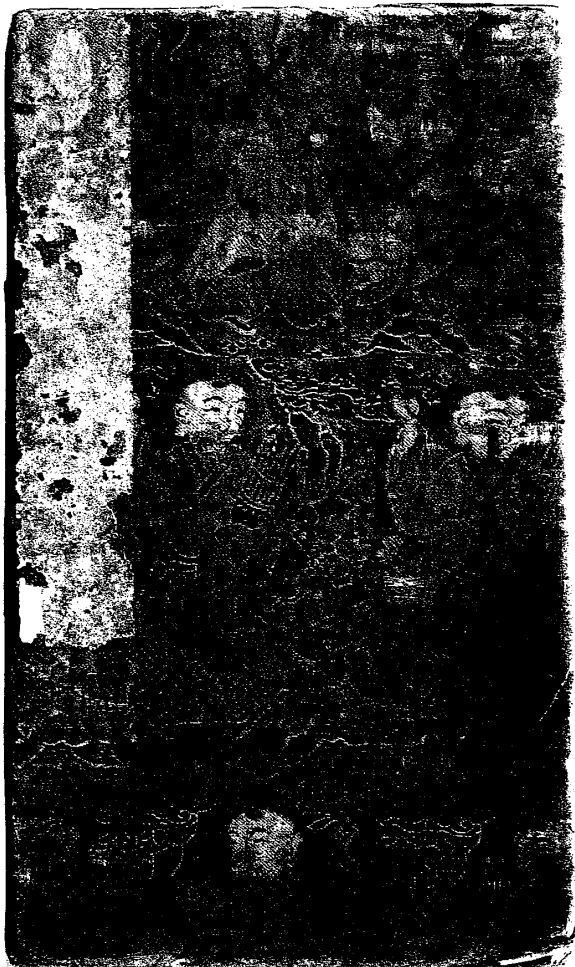
③④ 絕後光前登三邁

③⑤ 絕後光前登三邁

③⑥ 漢記曰光武中

③⑦ 漢記曰光武中

③⑧ 漢記曰光武中



③⑨ 蘆舟本外觀

- ③③ …… 近拓本
- ③④ …… 端方本
- ③⑤ …… 蘆舟本

追記

この稿を提出してから間もなく『舊拓・九成宮醴泉銘』（昭和十三年、文興堂）というものの存在を知った。これはコロタイプ印刷で、題簽は宮島詠士が書いている。中を開いてビックリ、今回の蘆舟本とほぼ同じなのだ。ただ採拓が良くないのか、印刷が悪いのか、シャープさでは蘆舟本に全く及ばない。しかし、まさしく同時期の拓である。更に驚いたのは、解説文の中で中央の亀裂に着目していること、「文字の気脈の一貫性」「ムラな気分がない」ことをあげて、他帖よりも勝れていると断じていることである。まさに、私の蘆舟本に対する見解と一緒にある。この本は布表紙の立派な装幀のものだが、何故か評価されていない。翻刻本と見做されているようである。

このコロタイプ本の存在によつて、蘆舟本は新発見などではなくなった。しかし、私と同様の見方をされていた方がいらしたことは、この論考によつて力強い味方である。蘆舟本と同時期の拓は、まだ他にもあると思われる。今後の研究が進むことを願いたい。

平成十九年三月